



English Times 6

英語を「世界で通用するために習う」から「日本で普通に使うために学ぶ」へ 絶対に必要になる表現するチカラ

高円宮杯第70回全日本中学校英語弁論大会の記念レセプションの席で、皇太子殿下は次のようにご祝辞されました。

伝えるべき内容を持つためには、まず自分の国の歴史や文化をよく学ぶと同時に、世界の国々のことも学び、他の国の人々の状況についても、豊かな創造力を持って、思いを巡らす力を育てていただきたい。



大分県英語教育研究大会で、筑波大学の卯城祐司（うしろゆうじ）教授は、『思考力・判断力・表現力』を養う新しいリーディング指導と評価』と題した講演で、「2020年問題」「2040年問題」について触れました。

- ◇ 2020年
 - ・ 東京オリンピックの年。授業で習う英語から、実生活で使える英語に転換。
 - ・ 中高生は外国人と自由に話せるようになることが必須。
 - ・ 英語を話せないと就職の選択肢が狭まる。
- ◇ 2040年
 - ・ 少子化により大学生の35%は外国人になる。したがって、大学の講義は英語で行う。
 - ・ 同様の高校も急激に増える。
 - ・ 英語が話せないと就職できないことが多くなる。

大分県中学校英語弁論大会での挨拶で、弁論を行う上で大切な3つのポイントについて述べました。

- (1) 本やネットで得た知識でなく、自分自身の体験談を述べる。
- (2) 聴衆に、参考にしたい、真似したい、と思わせる影響力を持つ。
- (3) 英語が大好きだ、という雰囲気を醸し出す。



これまで特に大事とされた発表内容は、自分自身の困難な出来事やコンプレックスを克服し、未来に明るい展望を持つことが大切でした。

しかし、世の中の流れはそれを通り越しています。自分の体験であることはもちろん、時にはユーモアを交えて笑いを誘い、訴えるべきことは真剣に訴えて聴く者に考えさせる。会場全体を惹き付け、魅了する影響力、そして共感力が求められています。

南中の校訓は「共感と想像」。今後の目標がますます明確になった気がします。